書評

Tomohito Baji, *The International Thought of Alfred Zimmern: Classicism, Zionism and the Shadow of Commonwealth*

(Cham: Palgrave Macmillan, 2021)

小　川　浩　之

本書は、著者が2016年にケンブリッジ大学に提出し、学位を取得した博士論文に修正を加えて出版した研究成果である。本書の第3章の多くの部分は、著者がすでに英文雑誌に発表した論文に基づいている。[1] 著者はまた、本書の議論において重要な柱のひとつとなる、バーク（Edmund Burke）の思想が20世紀前半のブリティッシュ・コモンウェルスをめぐる様々な思索――ジマーン（Alfred Zimmern）のものを含む――に与えた影響についても英語の論文を刊行するなど、[2] 積極的に英語で研究成果を発表している。さらに、著者は日本語でもジマーンの思想に関する一連の論文を発表しており、[3] 本書はそれらの集大成と位置づけることができる。

以下では、多分に評者の関心に引き付ける形ではあるが、いくつかの主要な論点に焦点を当て、本書の評価を試みたい。第一に、本書の議論の重要な部分は、ジマーンを中心に据えつつ、彼と同時代の研究者、思想家、運動家らを含めた人々の想像力、とりわけ政治的想像力（political imaginations）の分析から成り立っている。確かに、私たちは、時間的、空間的に直接経験できないことについては、何らかの想像を通してしか思索することができない。それは、アンダーソン（Benedict Anderson）がネイションを想像の共同体（imagined

---

1) Tomohito Baji, “Zionist Internationalism? Alfred Zimmern’s Post-Racial Commonwealth,” *Modern Intellectual History* 13, no. 3 (November 2016): 623–51.

2) Tomohito Baji, “The British Commonwealth as Liberal International Avatar: With the Spines of Burke,” *History of European Ideas* 46, no. 5 (2020): 649–65.

3) 馬路智仁「アルフレッド・ジマーンの国際的福祉社会の構想――ブリティッシュ・コモンウェルス、国際連盟、環大西洋的共同体の思想的連環」『国際政治』第168号（2012年）、16–29頁；「それゆえコモンウェルスへ身体を捧げた――アフレッド・ジマーン『ギリシャの共和国』と帝国共和主義」『年報政治学』2015-I（2015年）、191–212頁；「大ブリテン構想と古典古代解釈――E・A・フリーマンとアルフレッド・ジマーンのギリシャ愛好主義」『政治思想研究』第17号（2017年）、327–59頁；「大西洋横断的な共鳴――アルフレッド・ジマーンとホラス・カレンの多文化共生主義」『社会思想史研究』第41号（2017年）、74–92頁。

communities）として概念化したことからも、端的にうかがうことができるだろう。[4] 他方で、本書の中心的な主題のひとつであるブリティッシュ・コモンウェルスは、1926年のバルフォア報告書を経て、1931年のウェストミンスター憲章によって成立した現実の国際機構でもある。そうした現実の存在としてのブリティッシュ・コモンウェルスと、「彼〔ジマーン〕の想像されたブリティッシュ・コモンウェルス」（182頁。以下も含めて〔　〕内は評者による補足）は、[5] 相互に重なる部分もあるが、むろん同じではない。

ジマーンは、ブリティッシュ・コモンウェルスを、自らが古典学者として研究に打ち込んだ紀元前5世紀の都市国家アテネから市民的精神や民主主義を継承し、イギリスの立憲主義を体現するものとして理想化した。そしてジマーンは、第一次世界大戦後の国際連盟設立の際のみならず、第二次世界大戦後、核兵器の脅威の下で彼が核兵器や他の大量破壊兵器を管理する世界政府の樹立を提唱した際にも、「そうした理想化されたコモンウェルス」をモデルと位置づけた（193頁）。著者によれば、ジマーンは第二次世界大戦後、現実のコモンウェルスが衰退していると認識しつつも、コモンウェルスがモデルとしての有効性を保ち続けると考えた。ジマーンは、イギリスの立憲主義はその他の帝国的な諸原則とともに、アメリカに受け継がれたと捉え、いまやアメリカこそがそれらを世界に広める責務を負うと考えたという。しかし、評者には、ここまで現実と大きく乖離するに至ったジマーンにとっての「理想化されたコモンウェルス」――それは同様にジマーンによっていささか無批判に「理想化された」と考えられる古代アテネに淵源を持つとされた――とは、もはや何らかの象徴として以上の意味を持ちえたのだろうかという疑問が残った。

第二に、本書では、ジマーンや彼に影響を与えた人物たちの政治的想像力について論じる際に、トランス（trans-）、ポスト（post-）、インター（inter-）、マルチ（multi-）、脱（de-）、反（anti-）、非（non-）、超（super-, supra-）などの接頭辞が多く用いられる。歴史を超越した連鎖（transhistorical chain）、時代を超えたアナロジー（a transepochal analogy）、大洋横断的なブリティッシュネス（transoceanic Britishness）、大西洋横断的な知的交流（transatlantic intellectual exchange）、国境を越えた協力のための精神力（a mental power for transborder cooperation）、ポスト国民国家の思想的運動（post-nation-state intellectual movements）、大陸間を跨ぐ帝国連邦（an intercontinental imperial federation）、マルチナショナルなコモンウェルスというヴィジョン（vision of multinational Commonwealth）、脱政治化されたナショナリティ（depoliticized nationalities）、反イギリス（反アングロ）中心的な提案（anti-Anglo-centric proposals）、ある形態の非国家的なユダヤ・ナショナリズム（a form of non-statist Jewish nationalism）、超国家（super-states）、核時代におけるひとつの世界という超国家のヴィジョン（a supra-statist vision of nuclear one-worldism）などである。他にも、接頭辞をともなわない形で、大洋を跨ぐ帝国の公衆（an ocean-spanning imperial public）、国際連盟を中心とするコスモポリタンな民主主義の確立（the creation of League-centred cosmopolitan democracy）、世界的な公衆についてのアテネとイギリス帝国のモデル（the Athenian and

---

4) ベネディクト・アンダーソン著、白石隆・白石さや訳『定本 想像の共同体――ナショナリズムの起源と流行』書籍工房早山、2007年。

5) 以下も含めて、本書からの引用については、該当箇所のページを丸括弧に入れて示す。

British imperial model of a planetary public）などの表現も用いられる。それらの多くは、確かにジマーンらのスケールが大きく、ときにラディカルな政治的想像力をよく表現するものだと考えられる。

だが、若干の疑問もないわけではない。例えば著者は、ジマーンの思想を「統一された大洋横断的な帝国の公衆からなるポスト国民国家のブリティッシュ・コモンウェルスのためのプロジェクト」（211頁）、シーリー（J. R. Seeley）らのグレーター・ブリテン構想を「ポスト国民国家の思想的運動」（8頁）と評価する。しかし、19世紀末から20世紀前半にかけて、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、南アフリカなどは依然として「国民国家」の形成途上にあったことを考えれば、イギリス本国とそれらの自治領（Dominions）を中心とするグレーター・ブリテンやジマーンのブリティッシュ・コモンウェルスの構想を「ポスト国民国家」と表現するのは適切であろうか。ジマーンの構想が、シーリーらのグレーター・ブリテン構想と異なり、「イギリス中心的（Anglo-centric）」であるのを免れていたという指摘（15頁）は重要だとしても、「国民国家」との関係については、彼の思想は「ポスト国民国家」というよりも、むしろ「プレ国民国家（pre-nation-state）」としての側面が強かったと考えることできないだろうか。あるいは、ジマーンは国家（state）とネイション（nation）を明確に区別し、国民国家ではなく多民族帝国によって構成される世界を構想していたという著者の指摘に加えて、「ポストモダン」と「プレモダン」の間にはしばしば共通点を見出せることを考えれば、ジマーンの思想を、「ポスト国民国家」でも「プレ国民国家」でもなく、「非国民国家（non-nation-state）」と表現するのがより適切であるということもあるかもしれない。

さらに、ジマーンによって想像されたコモンウェルスでは、イギリス本国および複数の自治領とそれらを合わせた入植者の帝国（settler empire）が中心に位置づけられており、[6] アジアやアフリカの従属領土がヒエラルキーの下位に置かれることは、「文明化」の程度の相違を理由に実質的に正当化されていた。ただし、インドだけは例外的に、「文化的個性」を持つとして、ヒエラルキーの中位に置かれた。これらの点は、113頁の図3.1「世界のヒエラルキーに関するジマーンの見方」に端的にまとめられている。著者が的確に指摘するように、ジマーンの思想は、アジアやアフリカの自決（self-determination）に対する関心の低さという大きな限界を抱えていたのである。

第三に、本書では、ジマーンの思想が、ウクライナのユダヤ人哲学者アハド・ハアム（Ahad Ha’am）の文化的（または精神的）シオニズム――ヘルツル（Theodor Herzl）の政治的シオニズムとは異なり、パレスチナにユダヤ人国家を樹立するのではなく、文化的・精神的中心地を作り、離散したユダヤ人の間でナショナル・アイデンティティを確立すべきと唱えるもの――とアメリカの代表的なシオニストであったカレン（Horace Kallen）の文化的多元主義の影響を受けた点が強調される。そして、それらが、ジマーンが戦争の原因と捉えた政治的ナショナリズムとその基礎をなす国民国家パラダイムを克服するために、脱政治化されたナショナリティの間の調和を推進すべきと論じることにつながっ

---

6) 本書215頁では、入植者の帝国（settler empire）、入植者の世界（settler world）、入植植民地（settler colonies）という三つの用語が、基本的に言い換え可能な形で用いられている。

たとされる。[7] ジマーンにとっての「国際主義」も、国家間の相互作用ではなく、脱政治化されたナショナルな諸集団間の「競争的模倣」を通した絶えざる文化変容（acculturation）によって達成されるということになる。

それに対して、ジマーンは1930年代には、日本やドイツの拡張主義に直面し、武力行使も排除せずに対処することが必要だと考えるようになる。著者によれば、そうした際、ジマーンは人間の罪深さについてのアウグスティヌス（Aurelius Augustinus）の観念の影響を強く受けた。彼また、キリスト教からアウグスティヌスのペシミズムを受容しただけでなく、同時代のキリスト教の活動――特にプロテスタントの世界教会合同運動（エキュメニズム）――にも積極的に関与した。著者が詳しく論じるように、彼は1937年にオックスフォードで開かれた「教会、共同体、国家」に関する世界キリスト教会議（Universal Christian Conference）のために、「世界秩序の倫理的前提」と題する影響力の大きい論文を執筆し、48年に設立されたプロテスタント諸教会のトランスナショナルな連合組織で、エキュメニズムの代表的な推進機関である世界教会協議会（WCC）でも、国際問題に関する委員会の委員を務めた。なお、ジマーンの父親の家系はドイツ系ユダヤ人で、母親はユグノーの家系である。そして彼は、早くからシオニズムに関心を抱いたものの、キリスト教徒として育った。[8] その意味では、ジマーンの思想が、アハド・ハアムの文化的シオニズムやカレンの文化的多元主義の影響を受けたものから、アウグスティヌス的なプロテスタンティズムの影響を受けたものへと大きく移行したことは、それほど違和感なく理解できるかもしれない。しかし、評者としては、本書を通読する中で、ジマーンの思想の変化の頻度とその大きさには、ときに戸惑いを覚えることもあった。ある人物の思想が長期間にわたり一貫していること自体に意義があるわけではないだろうが、「彼の思想は特に深いものでも、特徴的なものでもなかった」というマークウェル（D. J. Markwell）による評価にも、[9] 首肯できる面があるように思われた。

第四に、ジマーンは、1919年に世界で最初に国際政治学部（Department of International Politics）が設置されたユニヴァーシティ・カレッジ・オブ・ウェールズ（アベリストウィス）で、[10] 1919年から21年まで初代のウッドロー・ウィルソン国際政治学講座教授を務めた。もちろん本書でも、そのことには何度か触れられている。それに対して、本書でジマーンのウェールズに関する知見や評価について言及があるのは、1926年の著書『第三次イギリス帝国（*The Third British Empire*）』からの引用部分で、イギリス帝国内で文化的自決（cultural

---

7) さらに、著者によれば、「本質的に母国（home-country）と結びついた、脱政治化され、脱領域化された存在（a depoliticized and deterritorialized entity）としてのナショナリティという彼〔ジマーン〕の概念は、文化的シオニズムのそうした普遍化を明らかに証明している」（96頁）。

8) *Oxford Dictionary of National Biography* (online version), s.v. “Zimmern, Sir Alfred Eckhard,” by D. J. Markwell, published September 23, 2004, https://doi.org/10.1093/ref:odnb/37088.

9) Ibid.『オックスフォード国民伝記事典』でジマーンの項目の執筆を担当したマークウェルは、ジマーンの国際関係論についての先駆的な論文も発表している。D. J. Markwell, “Sir Alfred Zimmern Revisited: Fifty Years On,” *Review of International Studies* 12, no. 4 (October 1986): 279–92.

10) その後、ウェールズ大学アベリストウィス校（University of Wales, Aberystwyth）となり、2007年にはアベリストウィス大学（Aberystwyth University）として独立して現在に至っている。

self-determination）の運動が高まっている地域ないし集団として、ジマーンが、アイルランド、ウェールズ、フランス系カナダ、オランダ系南アフリカ、そしてインドを挙げている箇所だけである。ジマーンはそうした文化的自決の運動の高まりを、「完全に健全で、道理にかなっており、実際に不可避である」と論じた（110頁）。

他方で、本書の記述に基づきジマーンの豊富な海外経験の一部を挙げれば、彼はオックスフォード大学で古典学を研究していた1909～10年に、「地中海の環境を直接調査するために」、ギリシャでフィールドワークを行った（49頁）。彼はまた、1922～23年にコーネル大学で客員教授を務め、1924年以降は、ジュネーヴ・スクール・オブ・インターナショナル・スタディーズ――世界各地から有望な若手リーダーを集めて行われた「ジュネーヴ・サマー・スクール」として知られた――の学長（director）となった。ジマーンは1926年にパリに設立された国際知的協力機関（IIC）の事務次長も務めた。そして彼は、1947年にコネティカット州の州都ハートフォードにあるリベラル・アーツ・カレッジであるトリニティ・カレッジで国際関係論の客員教授に就任し、57年に死去するまでアメリカに居住した。それら以外にも、ジマーンは欧米各国で開催された様々な国際会議や学会に出席し、研究発表や他の研究者との議論や意見交換を活発に行っている。そして、こうしたジマーンの海外での活動には、彼自身の問題意識に基づき行われたものや、その後の彼の研究や思想の発展に活かされたものも少なくない。それに対して、ジマーン自身が数年間にわたり関わりを持ったウェールズは、上記のような『第三次イギリス帝国』での簡潔な言及を除いて、彼の思想の中で目立った主題とはならなかったのだろうか。あるいは、1925年に創設されたウェールズ国民党が、「当初は政党というよりも文化的な集団であった」と評される一方で、[11]「自治領としての地位」の獲得を党の目標とする状況において、[12] 文化的多元主義や自治領を自らの思想の中で重要な要素としたジマーンは、ウェールズ（そこから敷衍して、例えばスコットランドなどにも）に関してより本格的に考察を行っていたのだろうか、という点に評者としては関心を持った。

第五に、初期の国際関係論の形成と発展におけるジマーンの役割とそうした役割についての評価も、本書の重要な分析対象である。彼が1919～21年にユニヴァーシティ・カレッジ・オブ・ウェールズ（アベリストウィス）で初代のウッドロー・ウィルソン国際政治学講座教授を務め、1930～44年にはオックスフォード大学でやはり初代のモンタギュー・バートン国際関係論講座教授を務めたのは、ジマーンに対する同時代の高い評価を示すものだろう。国際関係論の学問史の観点からは、著者が、カー（E. H. Carr）やブル（Hedley Bull）によるジマーンへの酷評――世論の力や利益の調和を信じる「ユートピアン」（カー）、「ユートピアンの処方箋に合致するのを拒んだ現実を絶え間なくあざけること」に夢中になっている人物（カー）、時代遅れの国際連盟の擁護者（ブル）といったもの（161頁、212頁）――を通して流布してきた否定的評価を、ジマーンのテクスト（特に1930年代半ばか

---

[11] Dylan Griffiths, “Plaid Cymru,” in *The Oxford Companion to Twentieth-Century British Politics*, ed. John Ramsden (Oxford: Oxford University Press, 2002), 509–10.

[12] 木畑洋一「二十年間の模索――両大戦間期」村岡健次・木畑洋一編『世界歴史大系 イギリス史3――近現代』（山川出版社、1991年）、317頁。

ら後半のもの）を精緻に読み解くことで修正している点も本書の特長である。ジマーンは30年代には、国際連盟に対して懐疑的になるとともに、枢軸国への武力行使も排除すべきでないと論じるようになっており、国際連盟を通した「グローバルな改革主義（global reformism）」から欧米の民主主義諸国間の連携を重視する「欧州＝大西洋主義（Euro-Atlanticism）」にその立場を移行させていたのである。さらに著者が、ジマーンによるカーへの反論――「ユートピアを探し求めるリアリスト」と題する『危機の二十年』に対する批判的な書評を通したもの――に詳しく言及している点も重要だと考えられる。他方で、そうした著者の議論を受けて、評者としては、カーやブルによるジマーンに対する酷評は、そもそもなぜ生じたのだろうかという問いをあらためて提示しうるように思われた。むろん、この疑問点については推論も含めてしか議論できない面もあるかもしれないが、結局のところ、「火のない所に煙は立たぬ」だったのか、あるいはカーやブルによるジマーンへの評価はより深刻な誤解や曲解に基づくものだったのか、著者の見解を聞いてみたいと感じた。

最後に、著者によれば、本書の主要な目的のひとつは、20世紀前半のジマーンの国際思想の発展を詳細に分析することによって、彼の思想的伝記（intellectual biography）を提供することであった。それに対して、評者としては、著者はその目的を高い水準で達成していると評価する反面、本書には、ジマーンの人生や実際の経験の中で、彼の思想がどのように形成され、その後どのように変化していったのかを論じるという視点が、やや弱いのではないかとも感じられた。例えば、ハスラム（Jonathan Haslam）によるカーの伝記は、カーの私生活にやや立ち入りすぎているきらいはあるものの、彼の人生や実際の経験――そしてそうした中での様々な苦悩や葛藤――を通してカーの思想や研究がどのように形作られ、変化していったのかということが生き生きと描かれていると感じられる。[13] また、今野元によるヴェーバー（Max Weber）の伝記にも、同じような特長があるといえよう。[14] それらに対して、本書は語数制限が厳しいイギリスの大学に提出された博士論文をもとにした研究書であり、出版時の紙幅の制約も大きかったのだろうとも想像される。しかし、いずれにせよ、ある人物の「思想的伝記」を執筆する際に、上記のような視点から論じることには抑制的であるべきか、それともより積極的であるべきかということは、おそらく読み手によって意見が分かれるところではないかと考えられる。

ここまで、多分に評者の関心に引き付けつつ、本書の意義と本書に対する若干の疑問について論じてきた。しかし、評者による拙い疑問点の提示は、本書の意義を損なうものではない。本書が、思想史（特に国際関係思想史）の研究者はもちろん、国際政治学・国際関係論、国際政治史・国際関係史、さらには20世紀のイギリス史や宗教史（特にプロテスタントを中心とするキリスト教やユダヤ教の歴史）などを専門とする研究者の間でも広く読まれるべき重要な研究成果であることは間違いないだろう。

---

13) ジョナサン・ハスラム著、角田史幸・川口良・中島理暁訳『誠実という悪徳――E・H・カー1892–1982』（現代思潮新社、2007年）。

14) 今野元『マックス・ヴェーバー――ある西欧派ドイツ・ナショナリストの生涯』（東京大学出版会、2007年）。